

巻頭言

「惑星科学の境界」

2, 3年前に東北大学で天文学専攻長を務めた。その間に大学事務より質問のメールがきた。「東北大学の天文学専攻と地球物理学専攻の研究の境界はどこでしょうか?受験生から質問がきていますので」とのこと。惑星科学はその境界領域にあたるが、そのどこが境界なのかを知りたいのだそうだ。「惑星科学はオーバーラップした部分であり、両専攻や地学専攻の先生や研究者が協力して研究しているから、どこが境界かなんて決められません」と回答したが、そこをどうにか決められないでしょうかとお願いされた。仕方がないので地球物理学専攻長と話し合っ、そのときは「探査機が到達するところまでは地球物理学、それより遠くの望遠鏡で観測する領域は天文学」という回答をした。そのとき地球物理学専攻と地学専攻との境界をどうしたのかは知らない。どこの専攻の間に対しても同じような質問がなされているのだろうか。

惑星科学とは何かを決めようとする、この境界の問題がついてくる。「惑星や小天体(と周辺物)の探査・観測、およびそれら測定事実に基づいた惑星・小天体(と周辺物)の起源・進化の研究」が惑星科学の研究の中核なのだろうけれど、具体的にどこまでが惑星科学の範囲かと聞かれると困る。惑星科学の発展には、天文学のみならず物質科学、(生)化学、工学などの幅広い分野の研究者が垣根なく協力し議論することが必要で、固定した境界はむしろ邪魔じゃないかと思える。新たな発見や進展、困難が生じると、もっと広い分野の研究者の人々の知識や助けが必要になり、惑星科学の境界は自ずと広がっていく。私が見てきたなかでは、それこそが惑星科学分野の発展の形であり、ワクワクする瞬間であると思う。一方、現実における日々の運営上の様々な局面で、惑星科学とは何もので、どこまでが惑星科学なのかを決める必要性がしばしば生じている。話は逸れるが、惑星学会をパラレルセッションで行うとなれば、その中の細かい境界を決めることも必要になる。

惑星科学とは何か、垣根はどこなのかなどには構わずにフラフラと自由に探究し続けるのが、惑星学会の遊星人には相応しく理想形であろう。惑星学会にはそんな人がいて欲しい。

田中 秀和(東北大学大学院理学研究科天文学専攻)